助辭本義一覽

上

815.7
Ta943j
T

池庵播守部大人述

同嗣業冬照大人撰

助字辨一覽

全一冊

千鍾房藏版

国立国会図書館
25.8.31

112429

815.7 Ta 943j T

助辭本義一覽

提要

此頃ものしたる人々おのづから池庵に学ぶ人にて、父は播守部なりしを、其のことを問へるのもとより、倫とられたる学ぶ人なるべくもあらぬ事なれども、其人の書たるを、古事記伝の考へなどを、其人の書たるを、はと思ひ出でそこの記をゆるすまでとして彼此をでの撰くもて同じく名添、紐鏡、詞の玉緒などに基づき、解きて、説かんとせし辨へられる所、皆人々ものしたるべし。扱うるに世世の人にて、傳りをれば、いづれも基準とせられるものなれば、まのあたりてそれぞれ、いづれば、いまらざる国語のもとを等記して、家世、一わたり、ものしたれば、簡古なるもたちまちとして、おのれ冬照小

今きれぬ。すべて何のもかゝるわりて。さてくしこのまどいるべくにあるれば。
仏せをあがりて。ちろ〳〵もるつ。彼本書本義考は。一音の雖語とつゞむを
音は開合。呼吸の動きもそなめて。紙云ひもれ。ちつをぞをもん。證と引き例
を挙て。詳くるものせれども。そを其徴證。例は。如ふと省き。要を
採て。只志の云。音義は一端のみを。うつゞ抜出されば。そもよく本義考は。一覧
とは名つるぬ。こを其本書は。音どくしうもんかれとしまき初学は徒乃。
うちにうちもむもづにして。別に。形のお書ものまぶ稿を脱せられば。
後に再考をばうちて。こは。疑とうはくくあくしもかくしさを
あらば。是を一説へとそてよのしなるかをもそをくきかを。さをくをの
それば本書のを。紙をやうひうめ。あゝあ。語りをとり出つゝ。はう強くて。
一本書は。そをくゞに謙退はふぼうひありて。物と性をは。つひ定められ
ばたとへば言のをは。をかくるやあゝ。はを本居大人は。はをてをるり
をゝ。をつにをせれど。をてのみを。幼学は。字は。はるるをぬこをちをを。
やをるれば。人をふをかをして。をを行のも。わづ。翁は。考へのように。きや
ゝ。をれを。字をして。ををつ。ちゝやへふをを。をいでありのこは。をを
をれをを。おれひあくれ。ををもあ。ゝをもを人をを。をををべれをを。をを
此書を。ゝの。ゝは。ゝ置。ゝもゝぞゝや。ゝこを。ゝ等を。假を。指辞を。づけて。をく
ゝを出し。又其。ゝもゝぞゝや。ゝこを。ゝ等を。假を。指辞を。づけて。をく
受辞をば。をば。て。下巻を出。つ。かくをるゝを。ゝを。上は巻。分へ合せて。ゝにを。は
ゝ上は。指。ゝ。活。下の受。ゝの。ゝまゝや。ゝ。ゝを。ゝ体を。ゝを。ゝねをせんを。ゝなり
ゝを。是を本書は。上三巻。下三巻。以て。引合をぐくせられば。ゝをくゆき
ゝをゝして。精。ゝを。ゝを。簡約をもれをして。一紙をも。ゝ。ゝを。ゝを。ゝに

はべらるれば、誠にかなしもえうべ、来たりてこれいりねもべも多うり、[illegible]
人よくくみ見まもてしまつり。

一 上巻の指辞の部より下巻は三稿の格を除きて、三稿のみれ、舞の置ざ所、
又四れともまりめべき用へべきあるといとうで歌し、下巻は受辞の歌より、
彼指辞は部より出るより、皆除きて、下の受辞のををうつべとりとそかく
をのもるに、そあるるに格ををてんりも、もやく此を普く引て、生れも
此なれるれて、今日まるるれ方、たよりまりまんとそ、三稿の稿ども
[illegible]

一 五の編二巻より出るれを、下りも立うてるをは皆のの、そもく章歌
抄れ出るひるるれまべ出て、そをいるれる、八立のわべの人まんも、
まべらべきまれば除り、又二重まう添てをはべそらまう

稀なるれべるり文などまはは、この混して章句もくるるもも多る
まの明るるは、をのるりの所をはをもくるるはゆるはべ、むるるを文の所
もれるりとして、本書にを、文部より出きんとて、除うはれば、ともれる絶
り、又五巻にるるるを出を除、をるる、ふるる、そもべ、等の歌、又七巻古風の所
の辞どものるを本書ふも漏きれ、れば、それるはべれ本書の追加とるて、
まるも書をるはべし。

一 此書などは、元より學者れ見べるのるあべ、をるる入立れ見宰をを、をを所
むをるの和べるりれば、卑言も嫌をず、文字は雅俗も拘べ、見それと
をれるるるをべるを見安く、耳に入安うんるあふ、べべ俗言、俗字を用
ひるるを多り、識者るれて、あるーべをなれ。

一 ちべ、日録をを入りべ、引見れ、生をりうんとそおるべ、本書の

簡略もまたばかりにて省かれたれども、それぞれの部に日録を挙げんもをこがましかりぬべけれども、先づ上巻をば、いにしへ徒そのやうにて、下巻にはそれぞれに紐鏡とは二種の辞どもを除いでく、其末に玉の緒、二巻よりはなほ多くの出来物受辞どもの中にもとりでられる辞どもを除きて出だしつ、大なる世次第をもそなへべしるるなり。

天保六年十一月

橘冬照識

助辞本義一覧上巻

上指辞部

橘守部述
同冬照撰

下巻三種上段指辞 紐鏡 右行

○ハ

その音ハは、又歯、葉、羽、端などの如く物を切分り離つをは一統あるなり。一統とハ、總てハ音に、一音毎に、言は統、五統ばかりある。その一統をいふ、此事の考へは、五十音図説に、詳く挙げ、その音して云詞は上に、離、放、葬、拂、投、撥、掃、散等は数多くもあれども、此故なりとせるなり。

○その辞をたくさんある物を、是は、そこしと云て、一つ取分る時も、残る二つハ、即てわるきやうなれども、又名は、空しと分ちて云へば、明暗までも、暖かなりしやうなれば、ゆゆしくもあれども、是を以て推るに、所と云へは、きはまりと云も、名に分ちて云辞、秋は、きはまりと云も、夏は分ちて云辞なり。甚中には、軽きと、重きと有て、至て軽く用ふるもあるべし。ゆめまど、なれども、辞の上にもて是てもを、分ちて云方より、出るなり。又此は、歌意は一

ゑ
続あるこゝあ行と同じく喉音ゆゑ也。そはあの音にて、あくと欲くと、又はの音にても、
れにアと、欲くるれあくるれし。笑ふ色も、ア、ハ、ハ、と、笑ふまと、ハ、ハ、と声立テ
ハアと悲しやなど云て、泣まのあるなども、皆此故也。さて此れにアハ、
れ甚ハにアるゞ欲く事中國遠まはそも事云ふまれど、東國ま
き、やきくにアなぞ云て、これハ、稀く、とくれと二ツ相重まるく、
老人れ言ふ、遺れるのみれやうなる。即此あくとくれと二ツ相重まるく、
欲息れ言ふ。あくれとゝ云也。此れ欲息此除のかゝ出ッ此ことゝハて見べき也。
古に三格の奇どもを挙ぐる共、巻首れ提要ことわるべきのみし。

古十九
あをゝ柳ゝとかいてうぐひすのなかてうたれ花。ゝ。
拾一
たかゝ玉ゝ水ゝ玉ゝのくるあるゝ。

○ナリケリ

哭れ格ゝきてゝ君れ分ゝをゝとゝくゝ古今なるまと学ばれゝ云ハ
きれまゝもあるず。花ゝ玉ゝもあるず。桜の花ゝナリケリと尋ぬの玉ゝ対て取分
ゝうゝゝ也。拾遺ゝあるゝ。かゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝれば。菜小松ゝ結ゝ子も多ゝれど。先ッ何ゝ

結ゝ子ハ嘗れ考ゝナリケリと。他のゝ子ゝ対て。取分ちゝる也。ゝれば留ゝの下ゝ伝う
取分テる釈義のナリケリハ含れる也。ゝゝ此ゝと云て結ゝ。動ゝれ言ゝて結ぶハ
ゝのくるゝ。いうぶれゝ諭しゝまゝ也。そハゝそれ指辞ゝ限ゝて。かくゝあゝ格のあゝも
ゝば。ゝゝゝまゝきゝもあゝゝれど此格ハ。次ゝれもゝゝや何ゝゝ答ゝも。ゝゝくゝあ
ゝて。只留ゝのかゝ。結び辭ゝ者ゝのゝゝなゝ。ゝゝくゝ上ゝ指辞ゝゝうゝ。

徒の格ゝゝゝ

古九
ゝゝゝ

注十九
うくるをもとゝしてかくあづらよも昔ゝてはやまゝの里
新古十七
ゆきかをそゝ山ゝたとてをそこゝ
ゝ歌を彼玉の緒ゝ八へうゝて結ぶはゝいとうもゝ云うゝる故ゝ歌語ゝ
なれゝてゝあゝ不ゝ知ゝゝ同じゝて指辞のゝゝ八云ゝ
者ゝゝみ也ゝゝゝの句ゝ捨ゝゝ昔ゝゝゝ止ゝゝゝ山科ゝ云
う方ゝ大方ゝ世間のゝゝ不遂ゝ止ゝゝゝ多ゝ習ひゝ分ゝゝゝたゝゝ
ゝ止ゝゝゝゝ也新古今ゝ所ゝ多ゝゝゝゝ大原ゝ云ゝ
ゝゝゝゝ者ゝ常ゝ習ひゝ分ゝゝゝ者ゝ多ゝ
ゝゝ也かくゝゝ世ゝゝゝ句ゝ留ゝゝゝゝゝ
緒ゝ世格中ゝ並ゝ挙ゝ句ゝ
千十心
あゝゝゝゝゝ

すぐれあり。此等も、たゞ、さき方、悪き方と、一つゝ取分ち並べて、
生成をはたらきなせるなり。

古一 みやまは松のゆるぶてきこゆるは野ぐれかりれはそなる
円 少しはいぶ、つゝしらずゆるゝは花ぞ散りしの表にたりんある

さゞめるなり。色のきえぬ方と、まめきくわるれつゝ方とを分ちて合せる也。なるべく人の心れしられぬべき方と、梅のもれうゝぶらるゝ方とを取分ち出る也。物は数、幾種ありても皆此定なり。なずらへ初じ。

古十六 うずくまれとまれたれ所のものるべば山のすゝをあられとはなる
菅万下 わるもんるは大そうちゝやもえわるあをるつ雪をふぶりはして

古今なるを、公家とのゝ、まほでわるを手方と対して、あられむ方を分ち出る也。菅万なるは、雪を対して、第づつるはと取分ちる也。雪をすぐ

置くなるはとものこ彩をもちのをもとの事ものはとかりをなる時は
時を後 引なぶ押へ辞りて只おのづからなり此れをもの結ぶ。一つはとして別に峯ケ
つゝ。是も絵をもくさ論ーせるよ也。をは上のあくはと二ッ三ッ合せて置くなる方
を。一ッ物ありて時ゆれば一格なれども為べれば一ッなる也常のすして即
是は。彼はなぐ云はれば別に格を立べきなるあるべきわぐなり。
格三 ぶれはそぶれみまきれをもぶく新あるしまもの、ぶそのもの
なは。雪れあるもなるして。五月雨なはと云をたるもあれるなり。

古十一 かなぐのゝ雪をもとあるをおもしろ生るる事おもしろうたるもきこゆ
日十七 なは系にふりつむ雪れなるとゆくわるをもゆくわるをもゆ

此なは多なはと欲なはを相兼て。君をれ二アとゝんゆるのをれると一ッのそ

を省き給て四季の景を附そ。扨のぼらう二ッ省るも。旅人を。タビトと云事のあ
しざまにもう欲きて。云々。
あるべき也。古今十二月あり。考は。はれてアリ。コヒシヤ又イカニセンズ。などやうの。を殘す。
十七なるべき。わうぐうのは。はれてアリ。夢ノヤウニ過ル哉。又或ハ。再ビ返リガタキコトヨなどの
此のまれ絶れる也。是を尋れ。鬼もる詞と。一方にはなる人もあれど。もう限れるは
あらず。京今世まで。ゆぐきれをのやうれ。留りのトも。サテモ深く積リタ
ルコト哉と云ちの言葉を含てもう。又もるべく欲息のをあるべ。は。恒のはよの雅
もおもしろくなれど。はもも。欲息はをあるべ。はじめにいくだうぐく。伊
勢物語上巻に。ゆぐけをんは。源氏紅葉賀に。きはつぐ。ぐぐ。ぐぐ。ぐぐは。
なぐくるは。も。欲息也。等のべ。はもに蘆荻鈔 古事記書紀哥解全部十五冊 に。
詳く弁へおもうれば。ちくにを伺ども省るり。

そや
拾大 ぐぐ。ぐぐ。ぐぐのぐぐ。ぐぐ。ぐぐ。

[illegible]

てば

梅づくと神さびてとぐめてば君はそぐもかつてるかも

わづらはしく恋づやちらたたりてしとどろかくてばはもしもよ

てば濁りて付き音らだの音也彼而有をなる而有をなる[illegible]

[illegible]の文はたるべくたばそ[illegible]故[illegible]

[illegible]と清てとは[illegible]文なればまて[illegible]挙ゲ取分つ[illegible]

[illegible]言のまてしまてて下巻まーの[illegible]

そ[illegible]

○も

下巻蒔上段指鮮 紐続 右行

ま行の音を唇音にて五音を唱ふ一音毎に唇れ相合へまり即物の相合比ふやにして一続あり[illegible]もの音をいくべ先ッ両諸ゑどもロと訓て諸諸共諸髪諸實両矢両刃共臥左右折戸などの数多り又持齎共居擾舫舟の又古書に也と訓付る處に亦字を書るなど皆相並兼ることある故也又神代紀に若煙火と訓萬葉に如己男と書るゑども相比ふを也即此字をコロと訓来れども比ふと[illegible]コロ[illegible]故也舌中此もの音を唱るに唇の形佛の口を結ぶう如くなれるより即纏くり[illegible]ることを一続あり[illegible]裳紐延裳の裾襴褌の数[illegible]袴も者裳は義なれバ共に纏ることあり又黐餅縻戻摺鋏捂紊ゑどし粘し縻ゑーの名也又むの音に

て共對睦結搦約群叢連け数。まの音ゝ又股跨儲混交眷絵迷紐
纏縻の類多くる。れよく五音皆含て右の音義を兼ねし又ものも欲
恩のことなるゆあるまて喪最燃問脆等の類れ一統なるものこそ本愛恵
ゝもて眼ゝもて忍ぶて堪ぶくる方ゝ出くる也萬葉五長呼ゝ父母を
忍れば貴く妻子れば米具斯宇都久志今の俗言ゝ子れ愛憐ゝも
ムゴタラシイコトジヤなどゝ云ムゴイメニアフ
ゴヰも即此米具好れ詰せる言也ゆゝみて神代紀ゝ憐愛又仁慈愛
恵をく訓る含て皆くゝ同語なるもの本同語なるもの故
恩ゝもくゝ考ふれ三格の格もこゝに載さるゆゝいくゝ
新古三
ゝ来ゝ
ゝ
ゝ

見えぬ人の際に、弁せるがおとこ。

古一 たちまちで、ぬれぬこの花をきん、梅のひとえをもうつも。もる人ぞしる ○ニツナガラ

整十六 ぬれもするかな。ぬれもするかな。○同ジゴトク

これらのもの下に、両ツナガラとも、同ジゴトクとも含るも、もとこれ、右のことあるが故也。

後拾十四 しら雪のいゆきもいとせもさびらるし。○皆同ジ如ク

同四 あしもみえこそ、ひとつ月も見ぬこそ、ひとつ。○何モ思ヒ寄ル

うゆうあるる雪ふるも、杉ふる右のことを、あるべし。傷ましくなる例ども

まして、味ふべきなり。

千四 山ぶしのかげ。○両ナガラ。ぬれもしぬ。きこえもしぬ。○センこの花のにおひ。○センこの花のにおひ。

千五百番 ○両ナガラ。ぬれもしぬ。きこえもしぬ。○センこの花のにおひ。○センこの花のにおひ。

これをもの結。んのことのもとと標して、歌に云。これ、共に、ぬれもしぬ、きこえもしぬ云

とある。拾遺二百番に合て、有家卿、「吹うづむ」をとりに吹うづむ。ぬれもきこえもしぬ。ぬれもきこえもしぬ。ぬれもきこえもしぬ

古十五
拾二

あぐまうるものをさしてゆくうのつやとなぞうれ
しかるべきもしぬればあるべきものなつ
ぶしあくやさ月のくづつまも出るもの
ゑれとを軽く添るもとつくうこそ彼欲鳥
引されハマアと跡きて云ツ引アハ即もの通音より轉じ
初メ付ても此ウ〳〵苦労デナラヌ又モウ〳〵部ナコトヨなどゝ云も
の音ヨて引ウ也さて此もの直ヨマアの言ヨ常る也有又もの下
ヨ引アと含めるもあるそ上のもの付下ヨ又れれマアと含れる也
ある と同
一例なるそれば芸の相兼るもあそ知て重しとはゝ
まぐさるわかくて上のはし此段のもを恒の用ひざまの外ハ欲鳥の一種ある
のゝ外を他さまぐて右のごとくいづくを也貫きて一ツるとゝぐあるる箇
條と分ているなのくヨ詳しく人まどゝとゆゝしさ人多のり
玉の緒ヨ拳ゝるゝ際のあるをゝそ次のごと三十五種ヨ分ちの引と三十六七種ヨ分ち引部
なくゝまりてそ六十七八種ヨ分てそのぬき也是と要しとゝぐ変ゝるゝあれど変

中天全国ゆゝるる也多のるて殊更ヨ分ちあて何の格くれの路とまひてそうせわしそ
過て也ハしくはるゝゝを多ゝそ初学の学ハ字のまゝを分ゝ
そゝれて新ゝてにをはヨ倦ゝれ終ヨ新とあんとそ此ハるるゝ
ゝれるまゝ也又絵ゝ分ゝを分つほどまてはむけヨ言のゝをとゝるゝ適加へゝ
言ゝも〳〵ハむつゝうゝのゝひまてゝ人ヨ紙きゝのゝを思ゝ
ゝ分ゝるゝりはる程ゝて也彼大人まてゝいるゝまてゝくゝものせるふゝゝゝみ思ふ
ヨ此ゝを出せるほゝゝて京ヨ蘆庵蒔蹊江戸ヨ千蔭春海の主達河ゝも也まてハ
かゝる方ヨはゝふゝくゝのゝれまゝゝゝもゝれば本居翁をそゝ翁ゝゝのゝれハ翁
も又かゝくヨゝる人ゝとゝゝゝるゝゝはゝゝてゝゝゝがまつて紙ゝもゝゝゝはゝを
せゝれゝゝてゝゝゝれ即用ゝゝのせゝし玉霰ゝゝ書ヨ ゝゝゝ

さるてがたくるく・ぬさもち安の月を・生時をてけくられまうばめでたき書れ
いで来るまーものとあやしき方ぶくるの行豊のちにべまぐはーく・
類義なる書とはまうつるやとわが又篇笑ひまぐでかるれる・

下巻三結上段格　紐統　右行

○徒

古十七　わらくぐつぐのみれるとやーはきかるーは口ろうきまぐるの
月カ　みやこ出てまのこうの原いぼくはいうれるまーは口ろうてうせ山
万二　こわるの山のふぐまるゆるーぐうの東かくのく故ーるぐくとれるひき
新古一　うるぐのーるりのーさまのまりぐろもまるぐのくれうぎりまられぞ
徒ーまるかくの如くーまるも取分まぐもも相兼ーまるくまるまーまるぐーまるぐ
て上ー指辞を置ざるをつるる也・此格のうるも皆一ッのまりて相のぐーる
所寄すぐに多ーり・かれば此格を元来ーーもの部ーりまるぐーるに重ぎう

見ーり・ふーと・ちかく紐鏡ーるぐくーるぐ・かーるーは・ーーーーーーの人もまるぐーるーは・ーーーーーーは・ーーーーーーそ
れまる・ーまるーまるーまる

當を指言・刺差・指狭渡等も狩皆右の定なり又定誘率等の類も
なぞらへ・又上の言て然と云も上と指云云神武紀訓云云とつゞ省
を指るて其々といへんもおれど古事記萬葉等に其の花と云ことを
斯賀波那其の父と云ことを己之父なぞよみ上て其こゝの出る
を再ひ指て云ときの詞也標導・築・篆・印・知領等のごとき又准ふべし
又々此その言て彼處と云も所を指て云詞足下と云も對ふ人を指て云
詞也凡此等て對へて・てにをはのぞ濁るを無
も上より引連けて・下てのみ附る也されば此ぞ物て就て其物事
故て上れ言に牽れて・渭て習へる也
を其と指定めて云るのみ用ひ来る字書て其爾等の字と指物
之辞也と注せて因し其をそのこゝろを恒て其所と云其者と云類
奇て・そをぶに・そのこゝろを・よめるうめし・かくて彼ある物あるを

指定ゆ云のこゝもあるべし物とゆべきもて・こゝるやうもこれるを
ちて・かそのこゝろかしをて方代をいふ神ぞもこゝ此等春日社をゆべ
ちもて此御社神ぞ云云とくるふべく也さて此の指定められど神のこゝ心を
こゝのうちの云なれば神ぞこゝろなるなどこゝ極ぶこればこゝを受る
也又因十八なる・かづこゝろをみやこのこゝろなるこゝ言身て庵を指ぞ
もて・これ此通りて・ちゆと云ふべく人也・こゝを自のうへなれば・ちゆと惟て云定めち
凡そ此等と以ても・てにをはて・結べと合せん方ちも此の云べき故とこゝ
て用ひべきぞこれると思べし・狩てに三摂の格とも一ッ出して彼指定め云
こゝげこゝを以て

古二 ちこゝろ・むかくちかぬともよもほべ人のこゝろぞうぜもふよあへね
後十 るこゝとちはこゝ出されし・再ちわれぞこゝろべのなきこゝちせ

此古今ふるまで、紀は對て、人はあぶれる方を指定め、後撰は、ぶ
船に對て、家分はよるべき方を指定めいへる也。
古十八 神なづきしぐれふりはるるあるかの紅葉ゆゑ
後拾上 おもはぬくれ立れもなくてよひくゆゑ
此歌も、指定めるるなるとこそ受辭を省る也。是と玉の結ふ動る
言て結ふぞとなる。既に上の際に、弁へるべし
千五 玉もかるばかりにのこるとけるくるべとなるへくるべ
こそおもふくるべしること、指定めて、そこをおさへ、ふるこへて、
の下に、彼にるとこそ受辭を省るなれば、狩上るるもし因例にて、
れるのみは、連へなり。
古十二 わがこころへ、そのこころに、奇とて、もがし、あふをこきりとなるはるり歌。

日に
なるこころでくとれるこころのぞ、ことをかるる赤
玉の結に、此歌を切るこそと云て、五種に分てるもおのうるさし、恒に、上句
の所とにて、其と指置て、次に生ゆるをこそ、結ふ例なると、
こそ此格を、彼方へ、ぐる詞を、上句の間に、皆いひ表る故に、その指辭と、こそ
なれ、ことばめまで引下て来て、即て、なりとぞ以て押へる也、さて此歌のそれ
なるこころにても切るこるある也。然う押へる下に、ヨの言れ含る故也。此よりは、多く
な、れるこころ上に指と、下を押るこの、二つの心ぞくと、今の俗言以ていへば、其が然ア
云云ナニクレ 是ハぞと上に置方なる也。ともも、彼ヘ云云ナニクレ云云ノコトハ、如此カツジヤ此ハぞと下に置方なる也。ともも、さこうぐ
ぐこし、又のく句れ終に置ぞるこそ、ぞヨとよの言れ含れるも、俗言に彼事ハ云云
ゾヨとも、其事ハ云云シカクジヤ其とも云、即此等のジヤこそ、其よの詞に傳へる言なり、又
ヤに、此ならぬのぞと、とく受て、ふるきなぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ、ぞ云云

とゝ云ふ事ハ、ぢきに、あいつるも、ナキ名ジヤと。時ジヤと云ふ也。かく下ニ、ジヤと云ふハ、上ニ必ず其ハ、と云ふ助ひ有るもて。推定むる言のことを、知べき也。又うしと云ふ辞へ續くて、かぐらうぞうし。此の中ぞうしと、結めるる歌も、かぐらうぞうし。此の中ぞうしのことく。

ぞうて切まくらぞうし ハ添るる也。

拾二十

たくまぶたにはまぶてとゝくわくばんまてこゝんのうちをいうぞ

同十二

ゆめのうちも おもりわぐられどねやをせ まくらぞ ゆうとれぐるさを

これも俗ニ、何ホド其、何ジヤ其、何ホド其、何ウ其、幾等其など、故と問て押へるを

るゆゑニ、切るなり。

後六

をみるぐ まむらぐたれ つをたれるつむしの ゆうにるるゆ ぞ

四十六

あをちのうちたらい きき道もちゆ をどろれ ゆたにるるふ ゆろぞ

ゆゑニ、此れ、などの歌の結言の下に、他の言と隔てるも、俗言ニ、誰待テ、云云ス

ルト其、何為ウレシイニ云云スル其、など此を云ふと上ニ附て、其昔誰ガ云云為ル名、其者何為ニ云云為タヨなども云ふて、此歌いづれニ云、續くるとも、つれわくぐ、又下と、やうと受て、まふぐのさちぐぞとよ。何ぞそき秋の夜ぞとよ。などよむ歌を、大方中てよのことを問ふやうる認也。又ぞとけと置て、此ぐ為ぞは、いうれる人ニかくるめぞは、などいくるけを、歌意ふて、例の俗言ニ、誰為ニ将為オモヘ為其ワイ、他ノ人ニ将係カイ、オモヘ其ワイ、など云ワイニ常りてもいやなどのもと同し。歌の結の歌ニ、此もにををのとゝ、いへを、いへきへうの也。いとちくらありて、歌意のをを人、含をたるうのをや、又うる山何ぞはありて、いのちやを、何ぞをありて、云なども歌意ふて、何ぞはアと、含りて、云ぐし。次るぞもと相似ふ。それば右の古今集ふ、いのちやけの可と、六帖ニ、何ぞもとて載セ。菅家方葉ニ、かる世ニなふぞは、家の云云の可と

一本ニハ、八ツでもとあり

でも

古一 いつくもつもりてあられとおもひわれてゞ袖ふれしやの梅ぞ。

但於ロ いそぎしく家ゝをきれ山ぢとに。いつもつもるあきの月ぞ。

これらハ、問ふ也。でもも問をあらそ。その俗言に、其者何立其（ジヤ）（ジヤ）波八雑

其（ジヤ）などゝ云ふごとし。もを欲ふして、賞美のあまりに、袖ふれし梅其（ジヤ）ニアと。

いつくもつもる月其（ジヤ）ニアと問ふを即ち詠る也。さてかゝるふるまれば俗言と

引出さるゝ。ことばおのぼらるゝのゝあり。俗言のうへ、さもをとく

たゞあるゆれあるねばなり。

でもあり

拾七 いつくもつもりあるうへ。いつくぞや。一時めぐりてあらんといふ也。

拾遺十三 いつくもつもりしけすぞや。一ゆるそれをくこゝろ。いつくもつもりてあられ

玉の緒に、これらのやを只係るのを也と教せるもたゞへとも。やハ、に通ふやゝ

こ問ふくる意也。此ぞとやゝの差（ケヂメ）とゝぐぞを上のくゝ。ぞと問ふのゝ辞。

呼ふ為て問をまて。ぞあるゝ。やゝの呼ふ為し問ときの点也。さて八

右の句ども以てあつ。大方玉の緒などまて。二ぞ。重ねるこゝをは

も。いつもぞ。さて。なぞ。などつれど。ぞをなく。不用（ノタツラ）なる辞あるゝ

ま。呼ふ助辞（ヤスイコトバ）といふも。行ふ。それ。のゝ。あるゝのゝ。

いつくて

後十六 みくに岡。一。それをふかをしをんまものみゆまとさてこゝろん

拾十五 のぎりのゝおれのゝそこにそられバくそれぞつ雲とまゝこゝん

玉の緒。此歌の句。七八首出て。其釈を上件。八くそ。十紅。十るをあゝで。

活る辞にて十のそなへば新古今にはなほそのことあるを例あきらかにすべし

あしん（已上五ノ緒なれど疑ひいへるを彼人まと似たることなれど説ども世にあれ）

を本曽伎にあらず曽伎八万葉に山乃曽伎野之衣ホ天地乃曽伎殺

どもて物に際界涯といふる詞也書紀に虚空とあるも空の極み

なるをなれば眼をとと云に同じ是も

出く集中に幾許と書て八くばくとも八そこばくとも八

と八そこばくと重りて八くそばくそとも云恒に

八くそばくとも幾量許にを也後に物語書なども八くせのれの

八くせのうきめなどいへるも八くせと通音にて同語なる明らかにてもあるべし

物語部の中八下巻受辞部に初殿に云と合せて要きを用ひたるよりく

云べし此にて此段のそ部に出べき辞なるあ〻ぶいく部にて出べきなれ

後に

後に

ありなくに八にはなほ八にはそ八にはそ八にはそ八にはそ八にはそ八にはそ

五一

もとにあるべきなれ八にはそ八にはそ八にはそ八にはそ八にはそ八にはそ

拾六
[illegible]ふあてゞどゝ[illegible]人[illegible]そゞ時なるこゝろゝびゝあきゝ引
此等のそゝもと却てとゝゝあてゝ歎せるもわゝゝこゝゝゝ也恒
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

後拾遺集に、ぞとうんして結びて、生命を切れるとあるは、又とも受けてゐるべけれど、凡そ受辭を下に活用して續くるものは、いづれのてにをはにても、必ずあるものなり。

千十一 後十五

まくらことばの緒にあらざるものなれば、まくらことばの緒にあらざるものは、ぞ、なり、やなどの、ことばの、ぞ、なり、やなどの、ぞ、なり、やなどの、ぞ、なり、やなど

附方との二続け外さるし。接き連る方さ。

万三 いにしへのきさみの時のうたのゆくさきをれば
新古六 冬ごもれるもりの朽ぐのもりのうへにおちてる月のうぶのさ山さ

これらの奇のもじ。おくさ。句々離々ものして。語をなまざさきにかく
多く入混るさも。耳ゐも立ざるもの。兵部卿のまぐれ。二ツ三ツぐらゐ。
入まぐらぼるさ。ををくなし。いろ比のもじを禁ぜれば。所も文し。續くこの
あるハざるべし。又物と親しき附方さ。

古十七 水のうへにたらうぐる。ふねの光るもうばたまぐ
四二十 をぐろざきさしのこどもの人なるばかりやこのつたにぐとうとと
假とこれらの奇ともぐべし。かく物の下と親き附方。おのづ。船之。嶋之と。之之通
ひてちゆるこらて恒と。天之國之。神之。君之なぐ云。新の之と同じ。即汝爾若。

如似なぐ。此言の。通音とて。船之さ。船汝。嶋之さ。嶋汝。天之さ。天汝とも
ひぐ。人の字。又物の称なぐと。名と云も。右れの通音とて本皆一ツ
なり。万葉三と。志斐と云。姫のもと。志斐能我とをみ。十四と。夫名と。勢奈能
とをみをとと。其同巻一丁の末と。勢奈那とをみたるかれば。枕詞と。春花之
云云。照月之云云。零雪之云云。なぐ。ぐるもの之。以下と。如を省るハあ
らで。之と云ぐ。直と如の義なる也。さげく如。しぐさ如。しぐ如。玉如。
やを。袂如なぐ。續け云るに。合せて知べし。又あふこのやうぐこの山。いうものや
いうぐの名。石見のや高角山。うの内のやうぐき山。ちうせのやゆづきぐ下云云
なぐ。やと置ものも。右れ志斐能。勢那能。此類とて。汝の義也。さて此汝さ。即
ホメゴト
美言とも云。詞なりれば。大國主神の御功を賞て。大名持神と申
タヘゴト
と。直に大汝と。通ハしいへるたぐひ也。終
と稱言れ方とも用ひて。汝命。那兄。那姉とも。又下と附て。彦名表。具那。於伎那

とも。又倭根子（ヤマトネコ）・伊呂祢（イロネ）などゆうみと用ひ。うれバ本を直し右の如く。そも也
ふ親〜ミ附し汝爾（ナセ）などゝ云もう出さるもすもるし。又此の〜言れ右の如く。物語の
下〜のみ附し用語ハ下ゝ居（ウヱ）さるも。右の意なれ也。かゝれバ物と指定るぞ
なゞ〜も。其音義元より異ゝして。他の指辞れ如く。結びに開（アヅカ）るゝ言ハ
あゝざ所を。そや何等と同じく相並で。一ツ〜心得来しハ。ゆうれるゝ也なり
ゝん。そ其ゝを。ゆゝ〜ういゝ〜ん。に。

古四 結人ゝあゝねゝのゝゝゝゝゝれゝくゝ陸のめゞ〜きゝる
後十 ゆゝもゝのゝくゝもゝゆゝゝゝのゝれゝゝゝゝゝ

古一 あと形のいとまもかくしあへず、ものぞ、ものとのもとびとの
日十七 ねみくるしき用をも、なほ、これぞ、これぞ、とこれば、人は、いとまもあるま
れと、とおぼしのるを、そと、重ねより。
日一 かそこのわれ、やしろやしろ、袖ふりてしたのゆくへん
日十四 さらば、ゆくあすの川、みるばかりとや、人のおもへん
これと同じのるを、やとうとれより。
日二 そのうちあるべきことをいくつ、紀の国をとこのみくへん
日八 いのちぶたちにの形、そのるばかりのうるおいより
うるも同じのること、何と重れより、彼紐鏡の中、行、そや、何と、一格
の結辞なること、かく同行れ、重き辞とかくはて、置まぎきのるに、
これをうく、うるはく、うるはく、うるはく、そや、何、そ、等とかくれ
いくるとて、元より結びて拘ぶるべき言のを覚えぬ、紐ゐ五の結
まぐれのれ格とて、分ち出せるのくとあるべそ、ぶふそれくの結もあ
るべめくに、ゆとくうれもめまど、そそ、ゆくの所どめあるれ
中より、適にそうれより形ると、そうり出せるうてば、後より見放ふ
こそあれ、そそ、ばかりしるそ、其引出せる本集のをくての所ども
を、合せて、明うるより、守部そ、あにかくふなり、そ、大方のてにを、何
れも、それくの用ありて置、ゆ、上のをちくいくるにけそ物と取分
ちも、そ、物を相兼、そそ、物と指定め、や何そ、事を疑ひ、そそ、物を
撰び出るべ如各一ッぼくの用を役て、置ばるる、又それくの
受辞はあるべめも、あるべき物ありるとのそ、右のあくゆるゆるる音な
るれば、別受辞、あるべきゆるあるべとて、八代の本集とそうと添へ

試みて、ばかりをもじめて、ちりつ、ゐれども愚なるへ一ッにて、推拙ぬべき
るあるべれば、ちくに生一緒とうひ置て、行段の定とまつまり、うれ
ば毎の結ては、此のみも格と立て、廿六七箇條に分られど、そこに生結の
格を、皆除きて、只辭の用へぞ、まのうへのうを、二三出侍まり。

古七 百九
ちはやぶる神のきりうん□はくうてたちもの坂もこえぬべうまり
ひてぬ、のうぶのうぶのまれはまおごひにてぶれうう□この川おせた

此歌を、の結びて、うぶまて切て格とられど、のを結びて切れる
るをあるべ、のを、ゆを云ふの、親しく附の、結を、細続をうぶ、三十八九
段の、二轉の格まて、只ゆ、引ゆ、うをまて、切きまるまり。

古十四 後十四 ○十五
ちはやぶるかわれやゆうんのうをうひにてまの板戸もとうぶねうう
ゆうをれば、はるへぞしうぶき結人のうりやうぶ。のはうぶまられば
心占

此歌と用の語より受るのうをこれもはうし、のを既にいるゆうゆ、融
語の下ゆのうを附て、用語ゆを受ゆを、其處ゆ、神語と者き含めて、ほぐけるる故ゆ、
そを古今ゆをまを、君やまんゆ家やゆうん 卜五 のいうをへとをを畧き。
後撰ゆをまを、君やうぶや 心ノ占 の定めるれぐ、云ほぐの言を者き
て、續けゆる也、はれじのりまを、忘れど 卜去契 のをまり。
今ものほぐとつけゆをまを、今を 限リ のをを也、をゆの才、そけのとき。
今ものきはぐ云ふなぐへてゆれべし、ゆうを此等の所由 ユ卜 を者ゆうゆ
で、只用語より續けるのとけをはうをて、初學の輩、の言ゆも
用語より受ゆぐあるとゆをゆうれて、ぐゆ引出ゆんもはうがるきぐ
なゆんうりゆ。

古十五
ふきてるふ、野辺風をせきあへぬ袖のうへ□此のころの
好忠集
野べのひかり初て春もちかきにつきぬべしとある□ものをもの
源氏蛍
あはれてゝ、ものおもふ人のゆゑ□あやめわかぬなげきをぞ
栄花ゆめ
やどりぬべしとあるに□冬の夜ねざめ袖をぬらす
注の俗の歌を、むつかしきやうなれど、はるゝ、そゝ、ゝなれば、
之の居るべきまにのこゝろ、何の難きやうあらん、ゆめ〳〵もの、ゝ
所を、大なる者にてく、う、別て、切れてゝ、置るひまもなし、それ
やうて、耳くなれるかたもやあらん、上に、別と云熟あるかゝりの所に
くゝつきて、はるゝにて、何とやをりつきもせぬこゝろ
こゝのある也、
古四
ちぎりをきてやかれぬる中の水くきのあとはなみぞたちける

四十八
かりのゝこゝろ、れの、ちかさ、かりそめにつきぬ中のこゝろ
はるゝ、何とやゝ、一ッの結びめにて、ゆゝるやうなれど、只のづゝにて、
必ずしもの、言と結びてゝ、ゝ、ゝあらず、されば古今八、あよ、れ、ハ
あつまにはなれぬ、ゝ、ゝ、ゝ

さるべき 限ナラン うき

限ナラン のを切るべきなり。物は際界と指して云ふ言葉なり。下巻三段部の初段に出づ。其条を見合すべし。

千十一 大ぐるまは走るくるまにきるるれてしるるのくるや君おもふ世

好忠集 世をつぐまゝわがのとふるとおもふまゝ

此歌のはと異なるあるべし。今の俗言に、常一通りのジヤ、吾のジヤ、オマヘのジヤ、なぐさと同じの也。さぐりて出せる、船の小嶋之の歌、又汝爾等の親しみ附言なるべし。されども文は古くも用ひざまよ多くあり。

古三 まつはるもの。ふるさとをそれば人なくなりにあるものめ

古れるを言と隔て、下句のとを云て一格とせり。されども是隔句躰の中にて言と隔て言を結びてあるべし。

万八 はるるごとをちるのべかるやれはのあるべし われるはれりや

これはをぢより結句かるるまで此外なるべし。たゞ遠る大方隔句躰の中にあるを云たるべし。のち隔てゝと一首見なして、それをも一格とせるもあり。されども是等をとゝてのべ言れ結びるあづうはなるべきをとゝぐべし紛べき也。

下巻三轉中段指辞 紐鏡 中行

や行の音を唱るに、喉音三行の中にも息と一ちぐに衝出て特に烈しく且急速なる音也。そを一端をいふに、膳と、いと云、膳も吹出る色を息と云、いきは膳氣(イケ)は義也。氣(ケ)は、字音にハ非也。日(ヒノケ)気、火(ホノケ)気、潮(シホケ)気など云て、元来の古言也。又勵(ゲマ)と物と弓とひて、弓より飛る物を箭(ヤ)といひ、箭を飛ス行と射(イ)と云、是皆ヤヨの通ずる如し。されば此いの詞も、稜威(イツイキホ)、勢(イキホ)、勇(イサム)、勤(イソシ)、開(イカル)、忿怒(イキドホル)、憤(イブリ)、安忍(エ)るの類多し。是皆膳(イ)に因て云詞なり。又嚴(イカ)、重(イカシ)、茂(イヤ)、弥(イヤ)、益(イヤ)、最(イト)、甚大な

ど云類も。右れ勵む方より派れて。嚴重なる方に往る也。又齋忌努力。勤齋忌禁などは。彼勵む方より。やゞてちゝを入て。しゝむ方にゝる。れる也。扨やの音のもべて。れ統八是等にも局らぶれど。大方てにをはの上に用る處八。疑ひと。歎息と。喚問との。三四種のみなれば。そも〳〵に用ある音の統のみを。あゝ〳〵諭もそれるとさて彼〳〵やと叫び〳〵やと愕るなど云類も。右れ急速なる統也。急に飛ぶ物を。箭と云ゞ如し。又事に甚切なる時。〳〵阿那耶と歎き。〳〵阿夜尓畏しまど恐るも。愕るも同じ心ぞ〳〵て。彼嚴重と。齋忌との類八也。即身に受て。苦く疼をば。苛辛。痛まど云いゝも。合せく考ふべし。又〳〵やゝ〳〵て。〳〵やゝ〳〵しまど喚のゝる類も。急速なる方れ統なる也。又續紀詔詞に。藤原朝臣麻呂等伊。百濟王敬福伊などゝ名の下に附て。伊と云るも。古事記に。我那迩妹命夜。万葉に。妹與汝与などある。夜与の通音にて。即呼うくるより出いる也かくて此喚言れ中ゝ〳〵やゝ〳〵いうに。〳〵〳〵やゝ〳〵の類も。喚ゝるゝ間ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ中に。其所由を。疑ハゝ〳〵ゝ〳〵ゝ是より終に。疑の方に。一統派れ出るより。即幾如何のいも。疑のやれ通音なるをおもへべし。されば。疑のやハ上に置て。〳〵やゝ。いうになど云て。何や〳〵いうゝやゝとも。そもざるも此故也。又も續きざる也。右の歎息も。喚と問とも。いづれも急速の一統なれば。皆同に切て詞もりかゝれる也。扨此れ中のゝも。ゝ可どめ。ゝてゝ云べし。例の三指れ格も。古に出さば。

古一
谷うぞ〳〵ゝ。ゝくるこゝりのひぐぐとにらへづるゝやゝ麦のもつむ。ナラン
後拾遺十四
いつゝ〳〵ゝくゝゝゝるゝゝゝるゝのやゝ〳〵ゝのゝるれゝゝうゝゝゝゝゝゝ。ナラン
此歌も。やの指辭をゝ。弟ゝ。ナランと云ゞ。ゝゝゝゝゝゝ

ナリヨと省き。その際にてそ。ナルと省き。此やうにてハ。ナランと省くる。是上の指
辞に限りてしばしば受ぎもし。前のそしうする也あるべきにて動の
言にて結ぶといふる歌の叶ひの雖きにもとも。又省くる辞と加くく
きもの上の指辞のもとまでに入くかつぶあきるもとも。彩ぎきるり。

新古十九
いはくに川そこやまずにて秋の夕。ナラン
玉の結ひにそやのてをけ。秋とをくうりて。夕ぎてそかりらずと
いふる。例の者ぐち。やそ者ぐちあでかりて。夕やすぐきに秋の夕ナラン
のをまるもの。加くまを絵にて名ぐき也。又此除に上のけ格に出されて
ハやの小雪山の冬のさびし。キ限リナラン。ぬきせぬものやさらぐれうき。キ限ラ
の手どんとこそにてハやの一格に出せる。うこ歌の格にあるを云て
もの格に立ぐきもをぐ。ぐうぐこうちゃと。

ぬ十七
新古四
まふけづとあまにてみはの留ぐふ。ふれや此をとうみやるるふ。ナラン
秋のつみ月やをぐまのちまの系。ナラン。あけぐもちくき。なまのつりぐ
此歌に限れば。ぬ。ちあまに結ぐやとらくふ。ちの歌に年くまぐ。ぐ。前の手上
のをちにに。のすまぐ。

嵯峨
古三
やのやこそて山おとこぐ。ぐ。ちぐでんわ道世の中ふるみやびなよ
源氏
いぶせくもちくふにものとおもふれ。やのやこふふ。ふふ人とまる子
此やのをそ。既に上に歌に玉ッ。ぐけ。ぐ。ぐ。ぐ。次の段にふと。ぐ合せるん。

問うくるや。
ぬ十七
うもぐ。ぐ。ぐ。

此詞とあの結に切てやと極して、先歌云、凡て疑のやに語のなまばに置て下とを
結び詞として結ぶと語の終に置く切てとの二ッあり。あらばくちやを上を続
く詞なり。文字ハ大方誰もおのづから誤るものハ多きものなるとやぢやく
置て切るやのことを必切て詞なり受るものを古人を拘ばらわきまへて
一ッも誤るものなりしと。後世の人をとてもれば是と語りて続く格の詞
なり。受ることの多しを例を一二出て、わきまへいとべ、ありやるやとこそ
定まりて、あらやなきやとそいとぞ、又ありきやあるりきやとこそ定
まりて、まりやまりしやとそいとぞ、又ぞやきうぞやとこそ定まり
まりて、ばやきうやとそいとぞ、又ゆやちゆやとこそ定まりて、又
ゆやちゆやとそいとぞ、又ぐてぐて語のやぢやとこそ定まりて、切てやのことを
詞の格なれば也。巳上玉の緒」事ハ此説の如くなれども、其二ッのたれ

ばかゆゆなどを説る故に、さらぬ時きハやうの例ばかりなる也故にこれ
聊の其釈を補ひ、此云ゆゆとをとりて、先ッ玉の緒に、やぢやを置やと
いふを、即右に引る三首ハ奇のあく、下を結ばぬ変半に置やといるハ、
神ひるでむをびしてられたることを書つるの凡やとそこん
四三 なつかしうしきくやいうりくむ「あらあらそこあくぎす
此三首ハ、下と結びてとをいるを也。さて續く詞なるうるほと切て
詞なりかくこの二ッの差別ハやと云て、只疑のみれ時を続く詞なり受
続く詞なり受るゆゆ故に其下をも又結びて、續うむる也。又喚問歎息
此三ッハ、音義一続なる故小其用格も又同しき也。等のことれ含る時を切て詞なり受ゆ切て詞
なり受るゆゆ故に其下も又結びて、彼、ゆゆるうれ、ゆきぬるうれ、ゆゆ
ぢうゆなるなり。ゆゆ、ゆゆ、ゆゆ、

なり等の類も、下を云ひ続くる格の時は、ぬるぬる云ひ、なりぬるぬる云ひ、行ぬる云ひ、受ゆる云ひ、受ゆる云ひ、たつる云ひ云ふ、たてつる云ひ云ふなどの、続くる例なるを、下の切るゝ時は、右等れ如く、上も又切るゝ様よ受るゝ定理也。凡り此等れ例を合せて諭さば、合点の行安うるゝなるを、然又むつゝしく云ひ云ふ、せる、彼翁れ心ぐせ也。さて玉の緒れ此條に引用し奇どもの切れ方るを下に、何ぞもイカニと云言れ含れる也。問ふ方の奇の子出あくる故也。即イカニを問うるゝるやの言れ結ぶる也。かれば此続くと切るとの差を問ひやれ言の中にも疑ふ方れ一統と、喚問と、欲息の方れ一統とに依てなれば此等の言れ統又上下れ切れ続きるゝるとを、かつべきわるゝ、唯ふうばに置ぶ、ぶるゝ置ぶ、ぶるのこゝる故に、定るゝるべき絡ふ、きれば玉の緒の其條ふ挙るる奇の中にも古今十四、あふる花で咲るるを、ぶしおのうぶ、ぶのもとをそるぶや、あんし、後拾十六、柏木のうれ下まれぶ、れをあのもと回や、あんし、ぶるとるゝ、これらを句れ也ぶるれど、下に、アンと云のこれば、

疑ひのやなれば也。れるゝけなると同格るゝを、彼欲息の格と、ゝに混して出せるハ何ぶぞや。諭

玉人ぶ、かやうに迷ふるのれ多うるものと、海ってあるをくゝ、ぶれふくきをこと

かやうに、かくて彼問うるやの下に、イカニと含わると云を、右れ同一中に。

後拾十 上けぶやとれもひ也ぶて、雪ふるきを、いうるぶで、君ゞ袖をくゝ、めやや

新古十三 きくやいなに、うるの文るる風ぶふもぶてれるなるゝ、ひあるとハ

ゝぶやうに、直に、いふと云言を、くゝくるも多う海って知べし。れ此数に

對て、きくやイカニ、渡ハるやイカニ、見でるやイカニの数、推なぶゝ

て、ちるん次には見合ゝぶ奇ぶ、これうを出ッ。

やを重ねる

古一 小ぶしのうちに、まをきふ、ふ、ウ、一とせとぶやいんとやいん

四三 ゝやくゝきをちやすぶくるゝ、ずんわぶやをもをぶてにるく

是を疑の方なれば續く辭より受て三ッのやそどと下に續くて結びて
新古七 あまの川かよふ〻きくにこゝはんそだのてしはちるや。ちる見や。
千十四 異文 わがられぬやや。たのむやふ□あるねよみうるみときしあくれの涙。
これらを問ふ方なれば切て詞より受て三ッのやそどの下を結ぶ。
と含みて切るこゝろ狂ふくやを変ぬる歌なれば。かくるやうてあり
引ケン。ゝ形やを 九ラン 霞やいぶりナルラン。たのむるやヨザランいるくや ヨザラン なぐやうに疑
ひの方は續く辭の格もあること。玉の緒ゝ二ッ混しるを言れ本義と得ざり
故なるべし。又此疑のやを二ッ重ねて一ッ結びてもあり。万葉四かくて
やゝやるらん。同七かくてやるにや老るん。などのごとし。

や何

後十三 あるふれどまねどやまわづ納れうるふ井ひうるうわうぬやなどで。

新十 義ぐ已共抽ゝ者て言るまれをのよみやゝひをふゝ
此歌ゝ入る詞のごし。やの言を何より上ゝおくべきゆゑあるを
もとゝ音義の際ゝ入くやゝきて学に八ゝのやゝふゝ
分ゝのゝやゝるゝん。八ゝ歌やゝ形ゝ有るゝんなどやゝに者を
して待ゝるもあるに對ゝて。右のごく者きたるを知べきなり。
歌ゝ。ゝ云ゝすゝるやゝ。ゝ玉ゝれのをゝやゝゝ。ゝまゝ
云ゝゝ方やゝゝで。八ゝあゝかゝやゝゝく九で」の形に合て
得ぐし。

なぞや

後十 大ゝゝなぞやわゝれを
拾十一 ゝのれをなぞやゝひゝき。□音ゝぐあゝれを引しとれば

此條と次と二ツと合せて解べし。

なぞや

なぞや（ナニ）

なぞやうくさもくれぐるき大そらで。わづらつてそあわとそてぶや。（カシ）（アラン）

玉の緒に大方何等なりとそ皆かと受る例なるに。右の如くなぞとなぞ

との二ツのみ。やと受る例あり。其中にちどそ。うと受るゆ多くして。やと

受るそいと少くなし。なぞそ。やと受る例のくそ。かと受るゆ

まー（已上玉緒）とのくちごそ。などうと云ひそ。俗にナゼニカと云ふて。うそ。

などと添る疑ひなれば。いつもの事也。なぞのてにやをわくくうた

て古き所まそ乃そび。六帖に。はいわとて。なぞやわが身をせめきんん

とあるそ。古のまて。疑ひなれば。寫し誤りにて。古今に。なぞと。とある

べき。右は千載なる。今一首風雅十にもあるそ。寫誤りなるべし

知ぶるし。又なぞやと云ふ詞そ。やそ。よのまにて。其故を歌に詠る詞なるゆ。

うに。なぞうとうとうる例そ。ぶらめとそて。わらるゆ。ぶらめ。きて

ふるのなぞ。なぞ等は言のまそ。次は何の條に出ッ。

おうてのや

反語そ。等にも文にも。言につそでは叶はぬある詞なて。何ものも

も。有用なるをあやにくくもふ入よくき詞なれば。懇ふさくしなくべき

わざ明るを。ものよりまそとよるに。玉の緒なぐるそ。

さて。箇條のみ。十四五種に分ちて。例のむつのくいひまぜれば。大なる

のみ。只其種類は煩はしく。紛らはきに。はりたうむ。めるまに

乃而。故そ。そくくもぐに分ちて。唯續く詞ゆかく。仮名に。

切て。詞ゆうれるとの。二種に約て。心得安くまとはむを。所謂うち

うくーとそ反を去て對をきうするて物に當れる時殊さらに激て強くこ辞也故恒に言れおそれくこ辞とハ用る場所ことなり かれと其を味ことちくふくれバ假に卑き譬をつくむこその俗言に人れ我を侮りて ハろを恒に強自慢をもるこう今夜墓所へ燈を點じにひくちを得ゆうをれどもひとん時彼言のちをてして ゆきてこん 行をやせんまどつひてハいかいわくして悪げるる 因に むげあるもうこ故にそれ 故にそれのづこ侮り言に激まされて 去なるよりも ユカナイデヤハとそれに答へら激て勢ひるもう是即反語の場所まである又成ハ此に誘る人ありて わうかく拉らに戴き居る此鬼をは汝こうきこくるくるはしとるどれハうありさらしうつてつくるくんさこ別の言ばいるとそこ 拉揚てるなへるとくくんてをへと

七くくちあしそくちあり雄此詞とちくくんるは忽ちに奮激して 棒ゲデ何セウカイとそうに答へるん是れのばられる反語れ勢ハ也 そも俗言れ話の場所 一つも たづくる ゴゴゴ 此反 されバ高れ奇り れれれ ゴゴゴくくく

[illegible]ものみぞあはれ。[illegible]古人[illegible]いと自在にて。[illegible]も文[illegible]。
[illegible]場所と一ツもつづくべはをとそ[illegible]やうにそ[illegible]れる所の人[illegible]。[illegible]
[illegible]てそなれそこにて。適いとば場所と[illegible]。[illegible]
[illegible]はづべきわざ[illegible]。

古五
[illegible]ときはなまちづはふあはし菊うつろふ秋[illegible]あくんとやあ[illegible]
同十一
秋の四れものうをとて[illegible]ふるづのひとりれるもわれやあ[illegible]
同十二
ふくれをるまてうしろみようをひそハわれやそなたをあぶてふれる
同十四
そをひなきふちやいとあく[illegible]ぶけのあくきせてあ[illegible]
同十六
はしもあたれやそ人のわうべき[illegible]あをとをぶてこひしきものを
これをそなとと結べるあり。上も又續く詞うを受てあれり。激みてをを。
[illegible]の奇[illegible]はうつ[illegible]はあんとやそ[illegible]」をを北のはで結[illegible]。

[illegible]一時のわうのく對[illegible]ひ激[illegible]たる也。次の行[illegible]。[illegible]
[illegible]「[illegible]」をを[illegible]しのるあ[illegible]れをを忘れわれるものをと。女[illegible]對[illegible]ひ激[illegible]
[illegible]。次の[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉の緒にしれやと五種に分ちて五箇條挙げれど同じもの相混りて其処に
そこで三種ならでそなし。

古十八 水の上にかりつるを見れうきまさるうきもあれやわれとそこねば
後五 ひぐらしのなくこの近きれやるきつるなぐにいりひさすらん

此一種を疑のやうにへれば引やの上にそれば引そうこと結び又クスツヌ
フル等にて留てうんと含むこともあり。

古十九 まくれバけべにまづ後見れどあるねむ夢のうべきたのみるれやハ
四十二 ものもこうもきんうのるれやハ□ゆつもたゆくかたく居ちひも

此一種を玉の緒にまりやハのことをいうべ。引ちり續くを皆歎息の例
ふくあれをを打ちて八れやををあるねと心れらづる格なり。

四十三 風ふくば波うつきしのれるれやハ□根ふあるれてるるねべるり

後十二 うちあもあるねるつをゆるれやハ□ををとをかきとのへば
筆ををとをと疑ををとつる是を世づり引をを切て辞を疑ひの対
を引ちりをかるをやハ此処に十六首引たる巻くまのをを
歎息は辞なりまれはをりやハ引りやかたりやまを云勢ひのみいひて
引ちりをを疑のををんうを結びの辞あるべきを疑ひまして読べ
物ばるをを理り通りづしをれて引りば續くやく切てや
ものををををいれを心は甚差めらく極られをりし礼
ふををくて箇條のあるを並べををれを引ををべし。

古十七 ををづあたりてををる布るれやをををれどかををひとをるき
四八 あれをををりあはををくるのやづるれやををを人のををづれもをを
此歌をやをづをばをうををれば引れををるをりをををををををを

一一
つづいく何まで云詞とおきて其中間に云入てうたの歌島を
そはに同手也やとそたうたは歌島のを毎に手わづらはして語の
ほつとうなつんわざそや
後十九
そそとうくゆてどもうたるれや二寄るるるとおきうたれて
後拾十二
ほどもるくらまうたうたてなうたれや二きてだたてやーうたに一う
ゆずとなまるるで〳〵いう所るでつたもとうたれどこれも杉たのたに
して何ちほどきうたて下巻うたせるるるるるとかるる何ちう心何ちうちどる
うたと同例ちう紙たて此歌島のように通のやとまたの結びと居てそのを
とくうたはいうきしどうも也。右れ哥ども玉の緒二巻十一葉に出ッ見合をべし。うれば以上三種
を壹一ッうてはどうり〳〵ればうやのとと〳〵れやハのとて〳〵うくのとと〳〵三種を
うと五種に分ちうるを右れ心得うづくどもある故也とて実を六十一種頭

ゆたとのれやうちうに見ここどゆふそやうたうたうたのたて〳〵れ
歌島れやの末うたーう。

やそ
後九
けうるうておるどーうたてなるうたうとうたりうたんやーそ。
拾二
やーーうちうて一葉うたれやなるうたうたうたりうたんやーそ。
うたへーれ〳〵やうれたれど同種うてそ其のとも所ーうちうい其ヲと
も〳〵其ハとも〳〵其モとも〳〵ばくのうはうちあるで其のに漏うを
なし。

歌島のや
古十一
ありうものさわぐ入うのーうたのうたばやーくくとうくこひ春ーとを
後拾十六
おおるけのれのおれいうくうたれば杉たうたはのうるうるやーやーそう

歌息のやをとりたびくいづくにもとまるものおれば
多くあつまれば思合せてもとづし独語りうれしさ次に出ッ

の

ゑゑや

後拾十二
いうまやん□あれあやしくこの家れ月や□ちはのきれかくうまし
金八
ばくるーこやめる人れるうまるあれもしろめきみづこうろや
此歌独語うたうもそとあれとゑ歌息ちりはぐうれる故也稀しはある
ちびくちるもあれどそとれくくてやつさ増れまやはよのもそ
ちるのそなの通音ちなるのそもそのの部ちせる点れわのれ
めくちり〳〵きくねちのうれきそ〳〵きのちれちのくこれてそちる
のはの歌ちて此等のあれのそなち結ちて点れわちのうろ〳〵やちの
なるぐ〳〵きちりねちのうるぐうる結じて点のちるのちるのとおくきも

訓九
あるぐ人そーぐちはの月るれや□ちゆちもうれれ山まれ
千十一
あるくちのくたぐるなちうれや□はれるきくるるうろそ
リヨ　リヨ
むの緒の五延　四巻二十一葉　此歌の中あるうる出ちて上のアるのこのすぐちそ別種
緒を同六葉出
ちゆうちて心得れうそ上れ　玉の緒を四巻十六葉
古十三
風ふそば波うつきしのれるれや□根ふあちれてなきれべうれる
リヨ
後十二
うはくるもあるぬ心そゆなれれや□ろちもけうれきものとゆのうば
リヨ
此歌ちちうるのうなう結ふ上　玉の緒を四巻十六葉　れて鏡のやうして
みちて歌息ちせれる是又いうれるうちう又
後拾三
あり昭の月ぶたあれやるくぎす此出ちゆうぐちそ
新勅十二
あるきちのせきれせちる心あれやいちのはれうぐやとぐちう
ヨカシ
朝忠集
いりうちてやびちそやりよちたちの人あれやまちやちむと
ヨカシ

此類と彼、アラヽのそれ等ども、同格とみるもいうべし。あるひは、
答むるやうにぶつぶつそれば、はぶけ人のなまり泥まんご思ひ
て、ものべにく弁へなくふでありる。さて此格を萬葉六に、もしうるかくるの
ごとあるこゝろ、ひる鶏にしもあれや、ゆ出はさし、同七、さくられ小堅西はなの
立わるこゝもあれや時とまもうん。なるの数て、上を今一種あるとひ、例よ
まれや、即是也。

よび出しのや

ぶぐるやふしの里。おあるやそほの山。うづくや高るの山。さる
しのやなぐるこゝ。さのみやさぐるの海。此等を所謂呼出しのやとて、
即よのを也。又そをまとおてるやきた。神九やいそぐれ
数を。牧羽ぐら。呼出して續くるつぐを。牧甲ゆるの。

拍子のや

ぶふるぐるきくやこのと。ほくぐるくやきの月。夕月よきくや問べれ。
ねるやねうるの。さくやりもあれ。まくや雲あれ。やくやそーほの。此等
を所謂拍子のやとて。大うる句れ中間うるの。よのをなるの。みを同じ。

ぢや

古三
きの月こだるきもふうるんほくぐるまでさのあるときうけや、
伊勢一
こうろあしんくをぢやロはのくるのきうはのまつのもーきと
此例ふをれぢやもやを牧よのをて。きうぢやバきうぢよナ。ぢやぐやを。
ぢをぐるナのを也。さるうに初句まぐるねるをるを。即ぢやぐやれ。
きうぢやる。ぶぐるやれ。ゆぢやれ。ゆぢやまなぐのめく。下を歌の字を活
てよみきり。

○なふ

玉ヒ緒云、なふ、まど、なで、たれ、たづ、いく、そ、いふ、いで、いそで、それぞ、件の數、皆てゝもとの結びは格用き故に一ツに合せて、何の部とも定め難し。さて此等の言はもと解むに、かくしも辞の數は多うられば得こはしくもうのでび、いくらうで採出てそれ、先ッなふのなは、直、價などの通音にて、物は分量とよる辞也。今の世は言ふも、直代、直段などゝ、價は量にいふ。ふそ、荷と訓むと同く、物は程とよる言也。などのとそ、底世を、常世とも通はしたゝて、涯のことなり。外門、戸跡、留止、終などのともおれど、次の誰のたも、此上の通音なれば、下の釈に合せて、言はを味と考ふべしまでのそ。

疑、扈世は、曽て、物は際界涯と云ふ。上はいくそは條、又下巻三轉部の初段等に出。たれのたそ、當代量、價、直等は同語同意は言なり。又他を

かくしもは相まれるものとかくきと云なるのたも同し。れそ等の轉也かくて何字を、ゼと訓て、所ゝも可方とゝ、ゝ、ゝ、ゝ、その平言に、ドヽ、ドナク、ドノ邊などゝ云とも、此たの通音なれば、たれそ、何人、いづれ、かこれ、たづそ、右はたれの等と省き、ゼと添ふるれば、即誰之也、ゝ、ゝ、ゝ、行に活轉て、疑のや、又數計のなどの通音、くそ員數は幾許のこれ通音也。つはれつそ、右のなどのくたれつたなどの通音にて、際當のとれば恒に其時と指當て、何時と云なども、違ふなる也。いふそ、幾何は畧き言、いづそ、幾許の約れる也。いでは、幾直は約れる也。ゝ以上三ツのいのうは、幾はくの轉用なるに、相合せて知べし。いづれは、何所等、いづらは、何邊等の義也。此詞は、比條の末に出されば、其処にて委くことわるべし。先ッ大ふこれにて、其大略を心得て、右は中、なふ、いでの詞なるもそ別義なるもあり。そは其所

まてとゝめるべし。例の三轉れ結びを下卷に出れば出ざる。

（後十二）にあたる　きものゝ　ゆくゑ　わるのゆくゑ　さるべ世とゝ　ゆれ。あるものもとゝの條うし。

（後十二）ちうくれどもふうはきて。あるのせものゝとゝでなりひとゝるん

此影を上の疑ひの辞の受を。為りの下に合りて也後拾遺るゝ。あとる

浦（ナラン）とゝのゝと省き。後撰なるを。伝ごうけきて（ナラン）とゝと省きてるづかし。

とゝ動（カ）の如言ゝて結ふとゝるゝ。はづゝの條に弁じ申べし。

（後十五）いのげゝり神もれしとゝ。（エ）うゝく山にふけかまれたちのまゝ一茶を

此影を神もれしとゝ。ごまうゝくとゝいゝとゝ。ゝくゝ山まいひゝゝるなれば。

ランの省れとゝまゝとゝる所と図がなり。此格のゝ。ゝゝり徒々ひつればゝくて

やみつ。

（後十二）わりゝ。ゝのゝいうふ。（一カ）ゝゝ。ゝ。ゝゝ。ゝゝゝ

わすれやすいこころ。「のこともいうこと」
まごころと結びあるも多くれば。それに對へてそば。省きまるをもあきら
うるさい。

もれとうるおる

古十三
うばたまのやみのうばくそちぶこれるゆあいくこ。もるたちざわ
後拾四
さぶ。さにやどをとをしてまぶれいづく。もるじあきのゆふぐれ
ホド　人里
ものの語りもと受ら格を結びてかくけ〜ずあり。そ見給る所人と等に。
月てもを防と相義る詞て。もと添云勢ひあるうちを彼と共とを
相兼。物一ツ跨らて。疑の語も物をたくふ〜ふ〜ふ〜ゆく故。結
びまぶるかくるばらけう。されば等ごとく僧と加へる詞どもの如
く。いくらばもいづくの里もと。各かうこたくらを所あり。よくぶき

の多ひと様もつ〜！
もと多ふをこたてもを省きまる。
古十　おトモ
そいくこう。まーうればうをいたもをの是なぶをて打ものぐうなる是
仮拾十一
却いこうけをきのけーのぎふを言けいつ。とくぶ。ぶを所者う那
世数をもとうをれももとを云。勢ひあるて。何を。をもう疑て云うあう
されば結びを物ばうぶる也。れうをも等の疑と詞すて。結を物ばうをう
ゆをいくうの居く。絡をはきまう。

他の物をもて。何とうくる。

古十四　ホカノコト
佐のくうのうばたまをんをとの心をて
同二十　ホカノ処
みをのくばいづくをあれど去の物のつをぶうれ
万八　ホカノ処
いづくうばあきもうをん和うをぶつぎのうをたまのうをぶく

万十七
梅のそ肌いつはをしづといふとねぐさきものの
此歌をそなりて云つのる對てそれをまれ他の物と何とくらべるはおもも
をずをそ其他のかをもて思をずも也いはくをあれどをそ他の所をあれども也其以
ものも僧ふるをくをくるを詞をて心をづし。

他ひとををしてたれをのくる

古十四
みちのくれものづもをわれゆをもてをぐんをれをるをるかくを
拾十一
他人
ををがるも古をれゆをもをるねをのるれば
後四
をををくをををるかくをおとをまを寺ハ分なをのををぐをうをん
古十二
をををるばたがををををしをの中ひををををるをををも
後十二
ををををを

ナニシニ為レコトヲ・など悔てもいと・又たとえば此盃を・汝が破リタルカ・と咎めら
れたるなどを・否我デハナイ・否其ハ誰が為ニ・など云ふと是也・

なきかせん歌

古十四
あつまやまでのうつみもれたきたをんこそこころのぐさまよりくる
後十五
なきかせんにてるのくるまをはしくしかりつまをとうくるかなして
古今十五
なきかせんを・否為ん欲ニ・後撰なきかせんを・否為ん悔ニ・なきかせむを・肌
ふとたんはけるを也・奚結ニ・ふ・この手ニ並べる・拾遺十一なる・こころー
ちんのはをナリちんこそ・こころ・こころ・こころ

其量(ホド)れ計(カリ)ごき方なり。疑ふ方なもあり。又も添へて云時も彼此と相兼て其量(ホド)とくふるゆるのをもあり。又此(コ)の如く何ぞと云て分量(ホド)なるもなる也 ナニにたまのとと云詞と恒と長しとも。頃心(ヒト)へ也。かくなるに云とらていくる何ぞ伊勢物語下巻と。何のきこえとなりて。又上巻まだに。なぞふるやきく人のめ。源氏と。まだにあらずうあらんまだにも。又仏の言に。何バカリデモナイ。まア何ンデモナイ身分ジヤ。なぞ。

古八 うくるもまだにありてあるひもきてもとまるぬるこゝてあるん

円十二 いのちやそなるあだに春のあぶめをあつまるこゝばとのうれくる

円十九 なるあるれどまだにまくうるやれどあれどいかくもまし

古十八 いうなるん

いうなるん いとなの中にまだにまだうは芳のくきこゝるのきこゝばし

新古六 ふうるんでうあるこゝうれていうるのるん。まかく時なれるるの神まぎ

此歌のうんまるいの延とまるて。古今まるて。いうかるまるれば。たくはぐき。新古まるまるいうるうるれまれば。切まるり。牡此るの延とまるうん

まる。下巻三結のうんの除まも少し出せり。

いうふして

後十 出まるりしているまるしいうまるてわるぐ。つまるまるへば

円十三 いうのしてかくれるまるまるぶ人ぶぐてるぐでまるかるこん

此歌と。玉の緒と。俗語と。何とぞ云と也とのくまるたぐるいうまる。

既ニ云ごとく。幾何の義なれば。幾量(イクタバカリ)ーと云ごとくして。即いくばくまたは
とゝもおのれじゆうまつものや。

いうで

拾六
たゝうあらばいうでみやこへはぢやんのぞまんとそぬを
日十六
こゝろのうちにおもひ名ゝとなりて。いうでわざとくゝらやん
いうでも。幾直(イクアテ)の義なれば。是ゝて俗ゝ。何とぞ。ぢうでなどゝ云ゝ
なれ。即俗ゝ云。何とぞのそもゝ涯(ハツキ)のゝなれば。當直(アテ)。量(アテ)なゝ。終ゝ同云
ゝ。おつめり。又このいうでと。いうでうとも。ひくゝ。何(ナニ)とてのをゝて。
豈のゝ。なれば。それハ省ゝる。

ぢうで

古十七
ぢうでのそゝぐ。(ドレドコラ)ゝ。

後二十
ゝゝ。(ドレコラ)ゝ。と結ゝ。(ニコキミジ)それの字おゝ。ゝ。
此詞。ゝ。ゝ。ゝ

後一 拾十九

ねとひとしれとはまぎれるといふ事

いふ事 うどはくまのうつうかくるるきくれなゐのうぶ

ふ事 又どしうとこそ云ふ事

第九 結ぶ結ぶ 結ぶ結ぶ 結ぶ結ぶ

為ふし 為ふし 為ふし

ふる也なる故に 彼相兼るとの差と思ひ

だみぐし

ふ事

いふ事 うどあるゆくえ

ふ事 うどまのもるに

ふ事 うくいふて受ける

いつれ辞 とくとし受きけ 下へそかくらねも但 彼相兼

て 云ふるもあり 但撰八 ふ事 とのくるもつづくるの

ふるまこと待ん 拾遺九 いはうとあるてそれば涙ぐりあと

ふるこにあるのきうる 同二十 ふ事 待々て 君ゆとみりしられ

をば法のもるでふそ法のみつる などのふし 法世の守るそ ふ

とも見ゆれど 八代集までの守るを をとくをとび ふ

みもまでうれどやくちゆるやちち

ふ

玉の緒云 ふでいくくこ辞 物のみまそぶりに ふくくこ也 ふ方代

などのひて多きこの 文きこ やはるこをひぐこ也 ふくこを 数と同

ふ詞也 玉緒など 班でられる 一せりきこのまそれど それこつきて

之載集八下の十ごとを引出して、謗れるをとりそけりて万葉集中に
幾許と書るも、幾ら許りとを云意の字なるを既に いくばく いくばく
こきばくなどゝみて、もて多きをもて、久しきをもてれば彼 いくばく
いくばくなどもあれどらひぐらし、あるを世し いくばく某を云言れ
あるを常に多くうるさきと論ずれば、古人のすることを世のくれいと
もゝべきをもいくばくをいくばくを俗 ゆゑくば七例、八十例、五百重波、千重波、一重山、
八重山、いくばくも、ゆゑくも、千重しるしるもゝ、七尾、やゝ峯、年のゝを、七
とを、なゝ世、やつを、ゝるとを、八百とを、百ゝるべ、ゝ多後ば、此類の詞共は、既に短冊、概略
に、数多挙おられ、此ゝを省ける、ゝど何ものゝを知ても、多くを数の言ゝを、ゝりし故に、
わのづゝに高くゝ、雅びても、けゝるとを世のゝを、右のゝ、数の言ゝて
いゝゝあるとも、ゝもゝれば、いくゝ某ゝゝのづゝる、ゝけゝ世俗の例ごとをゝ

ゝゝゝ、拙くゝを、ゝゝゆゝるゝゝゝ

○ゝゝて

ゝゝゝゝ、三義あり、其一のゝを、萬葉に、を字と書て、寄ゝもゝ、ゝゝゝゝ、許
曾、ゝゝ、表つき許増ゝど、所ゝふを多くゝみゝる是也、ゝゝゝあの音に、好嗜、
請乞、窓焦、渇望、ゝど云一続ゝり、又此許曾と活ゝして、ゝゝり許須莫
ゆめ、ゝゝり許世奴ゝもゝど、ゝゝゝゝ

事記、万葉等の古き所うの人、あまねくこれをみて、古今集こそ、の所うを、を
さ〳〵ならび、古今集以来、今にいたるまで、普く用ゐる所の大なる此其と、
撰出て云方は一統のことわり、さて彼、格の格を、大なる皆除き来れば、
を用ひざる所は、たゞ一なきまあれば、一二出たるまり、

古一 其のうれやうをあやまる、梅のをれをこそ、ゆかくこそ
拾三 やへにもぞうをぞれるやどのさくらこそ、ゆきにくこそ、をれ、をれをきこそ、ろわ
此歌を、他二ツと合せて、其中の一ツを、此其こそ、撰出てつる也、古今を
ちをこそ、こそ、あくこそ、せて、まと撰り出、拾遺をこそ、そ、入れまこそ、射て、
他の集一方とこそ、出たる也、

古一 をうつれば神こそ、こそ、わへ、こうのをれあうとやこそ、ひたちをこそ、
日本 ちをこそ、ぶれをこそ、ぶとこそ、こそ、ぶてつれ、四をきみうかんぐ、ちまりまき

此数古今一なるこそ、上に先ツ抽こそ、こそ、び出置て、下に、を物れ、
こそ、ありとや、嘗のなくと、をりとこそ、ひをやせるれり、十三を、ほて、上り
引こそ、こそ、をとくこそ、てつれと、撰び出置て、下に、四をこそ、ぶ、歌こそ、
を、ゆくをせこそ、て、ゆこれまし、れ、ゆこれるのく、法八まこそ、こ、ゆ一、ゆこそ、
つり、落つるり、ゆこれの用ひざるのこそ、ぶれの、まこそ、ふもつくこそ、れと、出こそ、抽
出こそ、と撰びゆくこそ、ゆこそ、を用ひざる、実まれば、ゆれゆくぎこそ、り、

形後十九 かこそ、こそ、あるのなれ、所の、を、の、を。四うつ、抽ゆこそ、ゆこそ、ひこそ、り、
大和物語 こそ、ひこそ、こそ、なこそ、れ、川こそ、ゆこそ、ひ、

此形こそ、を物と、此其云こそ、こそ、び出て、受辞と、歌語こそ、て、者きこそ、抽
こそ、を者きこそ、形後撰こそ、形こそ、こそ、ゆこそ、こそ、び出
こそ、を、大かの、を、こそ、りつげて、こそ、下こそ、ナレこそ、辞と、者こそ、也、大和物語こそ、

[illegible]

[illegible]ナレと。今あらたまる。

金七

[illegible]

新古十八

かきなびけすこのくらよぶにもづひむなるよ分こてかくてもやまぐはの枝

此歌。金葉なるに。枝おれバこそ。いきてもあれとゝ云べきを。いまの枝ゝ[illegible]

うけて。結びとゝ中ゝこめるゝ。彩なるゝ。分こてかくてもやまぐはと

云べきをやまぐはうけて。結びと者るなれバ。いづくゝゝ。遠く新

の一ゝて。行ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。山川の流れ

と加へても。結びの格ハ妨げざる也。彼上の「形見こゝ」の大野の[illegible]と。新

うね言ゝて結ぶこゝゝゝて。今ゝ[illegible]れど。[illegible]ゝ[illegible]

ゝとゝてもゝ[illegible]。

古十四

[illegible]

万十一七ゝ

いきのゝゝ[illegible]。ふれるあゝばもゝ[illegible]

此歌。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ。大方の例ゝ[illegible]ゝ[illegible]

指縛のゝゝと。[illegible]

を者る也。古今ゝ[illegible]。オモヘと者ゝ[illegible]。万葉ゝ[illegible]。アハネと者ゝ[illegible]

ゝ。切ゝゝゝゝゝゝゝ[illegible]

に。切ゝゝ也。[illegible]

除ゝも此格ありて。[illegible]

者きゝゝゝゝゝゝ。この二種も[illegible]

ゝゝ[illegible]

古十四
いとゆくみれども後世をうりかくることばをあつめあるべもあるる
四十七
なりけるやうにほのぼのとそ神代のことも思ひいづるなり
詞書と歌の詞とはいとよくあるとおもれども物と分つ絆なる故に合せて
つくる也されば詞書のまことかのうつくしきことは又もとよりそぶし方に分ちて
ひいづるまことかくれ家なるあるをおもひ出でたる神もなりひむかしめと伺ひ
はるいとなんてるなれハはるばるとなれてちくしてあれ
そをうつして
古一
あるはいとうん人をまことあるこたるべきはるばるとてもてそれ
後十
ふるるべき人のよいとはるばるいとおさーはあるきはるもてそれ
ものそ既にものるめく和二ッと相比へ兼る絆なるべう四もてそ今とこうそ
後とと相兼て云故に詞はいとうの者と危ぶむをとそなるれら書
既にもその除ようひつ
十九
人のうれしきいとばそうれうれそもひるそうもてそれ
拾一
ゆるるべうばはのももてそあも
四十一
もはるのとうもてそ人をゆけそ詞のもそれば是一き
もの詞にてるめ二首とば上のもてとはてあはむをのるき
格とし次の一首の歌とば巻のこそのもの詞ある格とて二種とるう
れど詞うるるの格ものもはあるず共こそ巻の相兼るも也て適
そそものの上ものかうみもてかーで変るも詞もなるそと
ものあるそ大うる詞のそれ巻とそそれを以て分ば限りもあるべうるず
又詞うはるきそ牽そ方そそたをはの関るあるそあるべうるず
ふをはの上を以て詞はるくまでも一ッそ推べきわざ明り又此奇どの左れ釈そ

此格を大うしては中ようしぬるものもあるべし。
そもあれ、紙ようひらばなどもうつくしぐるべし。

志もとして

後十一 あひそそばさくもむやとて杉もしにまちもしてこひうれ
拾十三 わもれるもんそそとくどとなりひてやるもしてゆめも見えもれ
——志もを志。其のを志。也を歌意の声にて、恒にものと摂分にて、語勢、こそ
の詞と同じなるとて、中れてづけて強うしるる也。此もの子、阪上の引の条にいへり。
そべ
——それバ、逢てる義を、驚くもをぐきこの歌を杉をるる所にて、意
——きくく彼と此とを、自分らていうれり。又拾きるを、意きくと
結義此にて、夢にもをぐきこのまるをそを此れくとるまに此しも、義意
をもよりて、二ツ合せて、を一ツとなりて分らるる也。是をも多の結に、却てのを

とるるるもれどもうつれてを、言のを上者にて、いとく本義のうをなる
ゆをれむをものでうし。

をををし

拾二十 あををうぶをとなふをうるれ——しをもひうんくをもををを——あ
千六 いををのまれ、うをひのあれをうるるるんをを——岸のゆをのうるる紀
四五 杜くをあくぶをををを——を菖杜ををぶうめあれうるるめ——の見れをるきや
むの緒に此歌の奇と、三種に分ち、各五首ばく出して云ふ。をぶめの歌を、ををう
——にををと云をを也。中の奇を、ををぶ——ををる也。末の奇を、いうをを杜
てをゆをるる例のうををし。をを、紙の約れるをて、凡て一ツをれバ、何をも
俗に、ををにも、それをぶふもを、云を以て見べきなり。

をををを

古十三
うたくらはさもこそあらめ美濃人めをそるとそるだわびさ
金七
ゆめうつつにあふとは見えぬ
拾十五
さもこそはぬるとはなしの
多の結ぶ
をそ八
をかるる格と同じ
なり。結ぶ其と指す詞なれば
ほどろ
をそ上れもこそ
こそれ結びと活用する
続古十
五社百
ゆめうつつ
袖の例
新千十七
玉の結ぶ
こそ結ぶ
受ける
新恒集
後十八
後拾十三
受ける

ものなり。

かくてしたゞめのもの除もり。此こそその除までの。上指辞どものもとをたて。

下巻なほ。下受辞どものと引あくる。ふたの辞の置ざまうけざま。

うもゆあひ等のをを味とは。けらにうもくあらはへ約べきなり。